Masahiro Sugimoto

《象・装う》

2008. 12. 21作　17×10×23cm

素材：樟、銀、銅、石膏、金箔、銀箔、日本画絵の具等

作者の言葉

象・装う

杉本昌裕

専門は日本画だが３年前から木彫に取り組みはじめた。日本画・テンペラ・陶芸・漆芸・金工等さまざまな美術工芸制作に取り組んできたが、彫刻それも「木彫」は自分の中では大きな壁であり、このように熱中するとは思いもよらなかった。

中学時代、絵は得意であったが彫刻はどうも苦手だった。思い通りに彫れないし、できあがりもパッとしない。高校時代、デッサンを勉強していて彫刻の若い教師から「平面的で表面的なデッサンだな」と何気なく言われた。大学時代の恩師舟越保武先生の研究室に行き《原の城》《ダミアン神父》といった名作を毎日のように見て、その清楚で存在感のある彫刻に「聖域」の美術を感じていた。その舟越教室の先輩たちとは今もデッサン会で共に制作し批評し合う仲間である。その中に先生の息子で現代活躍している舟越桂氏がいる。木彫は、このようなことから私にとってのトラウマであった。

３年前の個展で「タイの象」を数枚描き、会場にどのように展示をするか構想を練っていた。自分の展示には立体がなく寂しいと陶芸や金工を組み合わせていたが、何かもの足りなさがあった。たまたま木彫家の後輩が木と鑿を用意してくれ、ものは試しと「象の木彫」に挑戦した。記念すべき作品は、個展で好評だった。

写真の《象・装う》は木彫５作目である。ただ、前作と同様に木彫だけでなくさまざまな素材と技法を加え完成させている。木彫だけでは自信がないのである。でも今回の作品は彫刻家の先輩に見てもらおうと作品を鞄に入れて持ち歩いている。先日、舟越桂氏と会った時にも持っていたが、結局見せることができなかった。近いうちに「この壁を乗り越えよう」と新作にも取り組みはじめている。